

モニター意見

「京都盆地の地盤情報データベース」にちなんで

向谷 光彦

著者は地盤情報データベースに関する著名な実務技術者、研究者であり、その深遠な取り組みは各種出版物、論文等で周知のとおりである。対象地域が“京都”を選択されている関係上、既往の大阪や震災後の神戸とは異なった感慨をもって読ませていただいた。今回の特集において、以降の論文にも深く関与していることを考えると、有用な地圏のIT化戦略が実を結びつつあることを概説しているようにも受け取れた。例えば、地域防災計画にまで関与することは、意外と知られていないのではないか。今後予想される地方都市域でのミニ地圏ITの構築、世界遺産に代表される上モノとの調和など、継続的な展開とその方向性が示されることを期待している。

「無題」

匿名

地震や水害などの災害は地盤を詳しく知ることによりある程度の回避や対策は可能だと思います。

今回の京都盆地の特集記事は、かなり詳細な地盤の情報が掲載されており、充実したものとなっていました。同じ京都盆地内でも、地域ごとに少しずつ地層が異なっていたのは興味深いもので、災害の対策に役に立つ資料になるでしょう。

それと今回は口絵や図による資料が多かったので、イメージ的にもわかりやすかったです。このようなデータは災害の防止にも利用できますが、個人レベルで見れば住宅の建築などにも使えるし、他にもたくさん用途に利用できるのではないのでしょうか。

ただ、このような研究結果も有用に使えなければ何なりません。特に行政等の対応は自然災害に対し後手にまわっている感があるので、よく考えて欲しいところもあります。地震災害での液状化現象もこのデータを更に煮詰めることで、ある程度予測できそうな感じがします。

特集記事「京都盆地の構造と地震による地盤災害」を読んで

飛田 哲男

本特集記事は、京都市の活断層・地下構造探査の成果とボーリングデータベースに基づく強震動予測、液状化危険度判定等の最新の研究成果から京都市の地域防災計画まで広くカバーしている。

まず京都盆地の反射法探査結果をみて、このような地質構造が形成された年月に思いを馳せた。なぜ基盤岩が丹波橋通から巨椋池にかけて約15%の急傾斜で落ちているのか、宇治川断層の約200mのギャップはどのくらいの年月で動いたのか等、興味は尽きない。

また、地盤災害を研究するにあたって、ボーリング調査から得られる地盤情報がこれほどの規模で利用できるようになった意義は非常に大きい。山本氏が言われるように、この地盤情報データベースが阪神大震災の教訓から生まれたものだとすれば、これを有効に利用し防災に役立てることは我々の義務であり、地盤情報データベースと地域防災計画との間を埋めることが、地盤災害を研究するものが果たすべき役目であると感じた。

「無題」

川池 健司

京都盆地の地質構造がこれほどまでに詳細に調査されていることに驚いた。これらの詳細な調査結果や、地震強度や液状化危険度の予測結果を、いかにして市民に対してわかりやすい形で公表し、危険性を訴え地震対策に生かしていくか、その手法が課題のように思う。実際に災害が起こってから「起こる前から危険なことはわかっていた」と

言うことは、防災に携わるものとしてはいささか無責任だと思っただけである。

京都は実際に地震による被災履歴もあり、直下型地震に対して十分警戒しておくべきことは明らかである。しかし、現在の京都盆地に住む人々やそこで働く人々が、地震に対する危険性を認識することが重要だと思う。被害が広範囲にわたれば、行政による対応には限界があり、結局は被災者個人や地域の防災力が重要になるからである。今回の特集記事を読んで、私自身95年の兵庫県南部地震で被災しているながら、この9年間という時間の中で警戒感がゆるんでいくのを反省した。

「特集記事を読んで」

長谷川雅俊

今号(22巻3号)の特集記事は前号のそれとは異なり、違和感があった。

災害とは表面上は関係ない理学的な(と感じられる)記事がいくつか並び、前号の印象とは多いに異なった。前号は7編の記事すべてが直接災害に関係ある記事であったが、今号は9編の記事のうち、4編は地質の記事であった。見る人が見れば災害に大いに関係あるとは思っただけだ。

前号に戻ると、榎田禎子氏の記事がいろいろと考えさせてくれた。災害は行政と大きく関係していること、現場で何が問題となっているか(いたか)について含蓄ある記事であると改めて感じた。今号には学術講演会のプログラムが載っており、自然災害学会の最新動向を知ることができる。この中にも行政との関わりや防災教育など社会科学的な発表があるように見受けられたが、それらがどのような発表なのか聞いてみたい、あるいは本誌で読んでみたい。

22巻3号学会誌についての意見

中村 一明

モニター報告が遅れまして申し訳ありません。自然災害と一口にいっても多岐にわたり、自分の教養を深める意味でモニター投稿をしました。

まず、22巻3号が手元に届き、今号は京都盆地における特集でとくに液状化現象に関する原稿が目についた。過去の爪あとがこれほどまでに鮮明に地質構造の中に履歴として残るものかと感心した。新潟地震における新潟市域で液状化に伴う被害は報道でしか見たことはなく、関連したもので興味を抱くところである。

これからの自然災害に対して被災エリアを区分すれば、都市と地方(山地など)になるが、都市における影響のみが大きく取り上げられる傾向にある。

現在の少子高齢化社会に向け、地方部、特に中山間地域における災害防災が地域住民と共同で安全を確保していくシステムづくりが今後の課題であるように思われる。私ごとであるが・・・。

地域社会への貢献として、災害ボランティアに参加・登録したいと専門サイトをインターネットで検索していた。しかし、サイト数が少なく、また行動方針も明確になっていないように思う。いざ必要になったとき、短時間で行動できる機能と組織を期待するところである。